

青少年の社会参加に関する

研究調査の結果から

総理府青少年対策本部

調査担当参事官補佐 坂本 稔

調査実施の概要

1. 調査の目的

我が国青少年の社会参加の実態及び意識を明らかにすることによって、青少年の健全育成施策に資することを目的とする。

2. 調査対象者

我が国における15歳から24歳(昭和53年4月1日現在)までの青少年、11,000人(回収率77.3%)

3. 調査の時期

昭和54年2月8日から2月18日までの11日間

4. 調査方法

調査員による個別面接聴取法

5. 標本抽出法

層化二段無作為抽出法

調査結果のあらまし

1. グループ活動参加の実態

(1) グループ活動の加入状況

5人以上の任意加入のグループに加入している者は36.2%、以前は加入していたが、いまは加入していない者7.7%、加入していない者56.1%である。

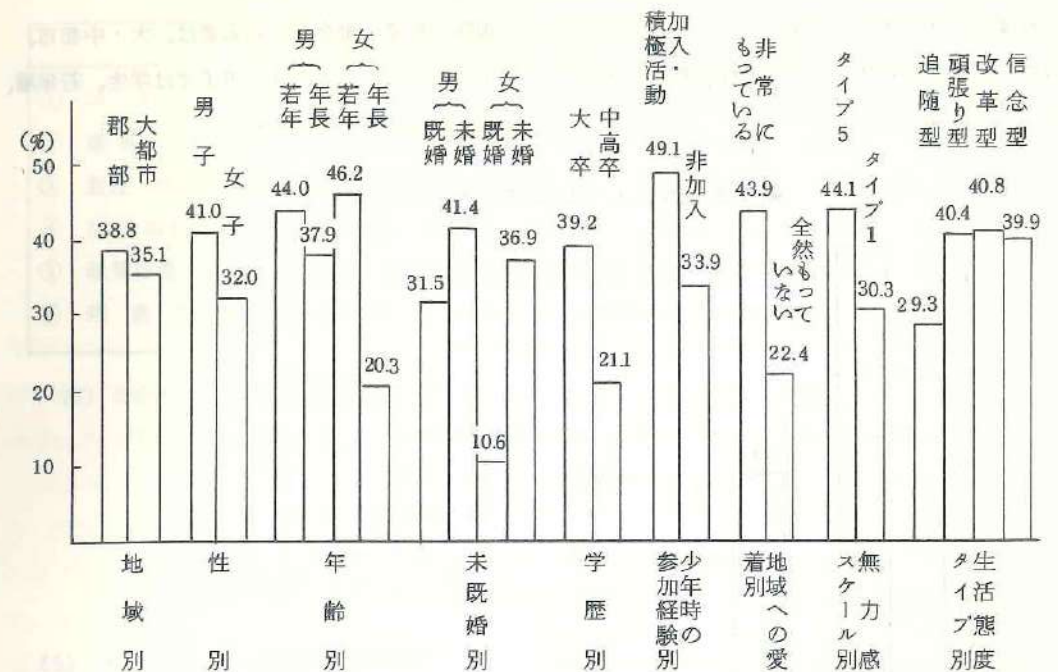
属性別にみて、どういう人がより加入しているかを見たのが第1図である。これによると、郡部男子、若年層(特に15~17歳、第2図参照)、未婚、大卒などで加入者が多いが、無力感の低い者(無力感スケールについては、後述8の(1)参照)、生活態度が積極的な者(後述8の(2)参照)にも加入者が多い。

一方、主婦(8.2%)や無職(13.9%)では加入率は低い。

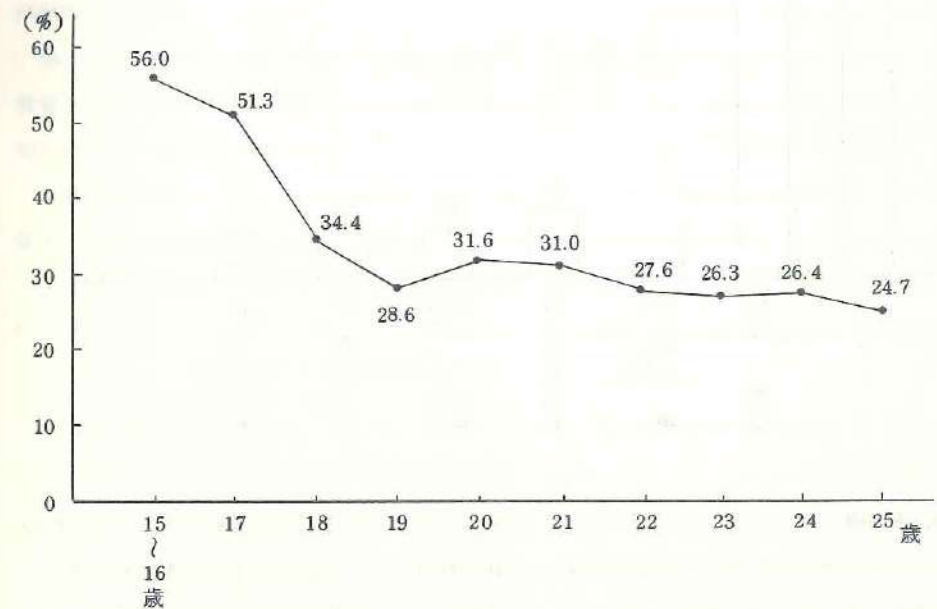
(2) 参加グループの種類

グループに加入している36.2%の者がどういう種類のグループに参加しているか、その内訳をみると、「学校のサークルやクラブ」に加入している者は64.7%、うち在学学生では90.5%、「職場のサークルやクラブ」に加入している者は11.8%、うち有職者では42.8%、「地域のサークルやクラブ」に加入している者は17.8%で

第1図 属性別グループ加入状況



第2図 グループ加入状況の年齢による変化



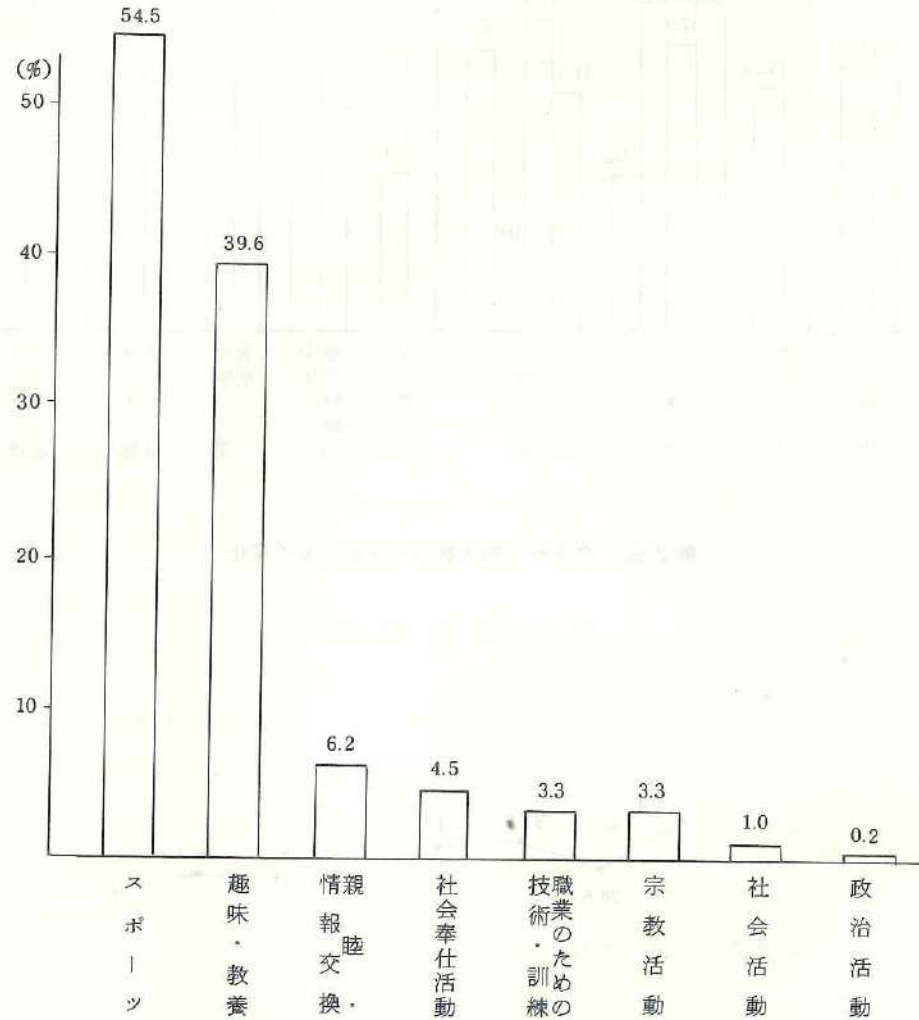
あり、その外、全国的な青年団体3.7%、宗教団体3.4%、政治団体0.1%となっている。

(3) 活動内容

加入しているグループが具体的にどのような内容

のことをしているかをみると第3図のとおりである。図で見るとおり、スポーツの54.5%、趣味・教養の39.6%が大半を占めており、その外、親睦・情報交換6.2%、社会奉仕活動4.5%などとなっている。

第3図 加入しているグループの活動内容



(4) 加入動機
活動内容ごとのサークルやクラブへの加入動機をそれぞれ3位まで並べると第1表のとおりである。活動をしている人が多い上位三つの活動では、いずれも「よい仲間を得るため」という動機が1

スポーツ活動をしている者は、男子、有職者、無力感の低い者などに多い。
趣味・教養活動をしている者は、大・中都市、女子(特に未婚・大卒)、男子では学生、若年層、無力感の高い人などに多い。

位を占めており、その他の活動では、それぞれの活動の特色に応じた動機が上位にあるものの、「仲間」という動機が2位又は3位にあり、グループ活動への加入動機として仲間志向が目立っている。

第1表 サークルやクラブへの加入動機

(単位 %)

	加入動機		
① スポーツ	1) 仲間(55.7)	2) 余暇(35.8)	3) 特技(29.9)
② 趣味・教養	1) 仲間(47.9)	2) 特技(38.6)	3) 余暇(33.6)
③ 親睦・情報交換	1) 仲間(69.3)	2) 余暇(28.1)	3) 人格向上(24.5)
④ 社会奉仕活動	1) 人格向上(45.3)	2) 仲間(40.3)	3) 余暇(21.6)
⑤ 職業技術・訓練	1) 特技(68.6)	2) 人格向上(32.4)	3) 仲間(19.6)
⑥ 宗教活動	1) 人格向上(52.4)	2) 主義に共鳴(50.5)	3) 仲間(25.2)

注) この表で「仲間」、「余暇」等は略号でそれぞれ次のことを意味する。

- ア. 仲間 …… よい仲間を得るため
- イ. 余暇 …… 余暇を有効に過ごすため
- ウ. 特技 …… 特技を身につけ生かしたいため
- エ. 人格向上 …… 自分の人格向上や成長に有益であるから
- オ. 主義に共鳴 …… その主旨や主義に共鳴したから(思想や信念に賛成したから)

(5) 活動時間、参加回数、所要経費

(有職者では56.3%)

サークルやクラブの1回当たりの活動時間は2時間程度が一番多く、男子や年長層では相対的に活動時間が長い。

参加回数は、スポーツが平均14.6回、趣味・教養8.8回、親睦・情報交換11.3回などであり、相対的に若年層の方が参加回数は多い。

所要経費はスポーツが平均1,047円、趣味・教養1,130円、親睦・情報交換652円、宗教活動320円などであり、相対的に男子や年長層が高い。

- ③ とくに理由はない 12.1%
- ④ 家事が忙しくなったから 8.7%
(既婚女子では64.4%、主婦では70.3%)
- ⑤ 自分の希望が叶えられなかったから 5.7%
- ⑥ 行事や集会がつまらなかったから 5.5%
- ⑦ グループ活動や団体活動に、ついていけなかったから 5.5%

などとなっている。

2) 加入していない理由

加入しない理由を割合が高い順に挙げると次のとおりである。

(6) 現在加入していない理由

1) 以前は加入していたがいまはやめた理由
挙げられた割合が多い順に並べると次のとおりである。

- ① 勉強が忙しくなったから 33.2%
(学生では51.0%)
- ② 仕事が忙しくなったから 19.3%

- ① 仕事が忙しいから 24.2%
(有職者では51.9%)
- ② とくに理由はない 23.8%
- ③ 適当な団体はどこにあるか知らないから 16.8%
- ④ 適当な仲間がいらないから 16.6%
- ⑤ 勉強が忙しいから 13.5%

(在學生では29.3%)

- ⑥ 家事が忙しいから 11.2%
(既婚女子では61.8%、主婦では66.8%)
- ⑦ 団体活動が嫌いだから 4.0%
- ⑧ 行事や集会がつまらないから 3.5%

などである。

「適当な団体を知らない」は、郡部、女子、無力感の高い者、「適当な仲間がいない」は、郡部、未婚、無職、無力感の高い者にそれぞれ多い。

2. 小・中学生の頃の参加経験

小・中学生の頃、地域の子ども会やボーイスカウト、ガールスカウトのような団体やサークルに入っていたかどうか、入っていたとして積極的に活動したかどうか、は現在の参加状況に影響を与える要素になるのではないかとこの観点で、このことを聞いている。

「入っていて積極的に活動した」者は15.5%、「入っていたがあまり活動しなかった」者24.8%、「入っていなかった者」59.7%である。

「入っていて積極的に活動した」者は、大都市で低く、男子、男子の教師・技術者、大卒、地域へ愛着を持っている者、現在又は過去にグループに加入経験を持っている者、社会奉仕活動や社会活動をやっている者などに多い。

子ども会、ボーイスカウト等への加入動機は、「自分が進んで加入した」17.1%、「親や先生からすすめられた」9.7%、「友達にさそわれた」9.0%、「当然に加入することになっているから」63.5%、「その他」0.4%となっている。

「自分が進んで加入した」という者は、大都市、男子、無力感が低い者、積極的な生活態度の者、現在又は過去に加入経験がある者などに多い。

「当然に加入することになっているから」という者は、郡部、女子、無力感が高い者、消極的な

生活態度の者、現在加入していない者などに多い。

3. 公衆場面における参加意識

ここでは、公衆の中での三つの具体的な場面に会ったときに、青少年がどのような態度をとるかを聞くことによって、青少年の公衆の中での社会参加意識を見ようとした。

(1) 商店街での迷子の事例

商店街で迷子を見かけたとき、「どうしたのと声をかける」者71.5%、「だれかが、声をかけるだろうと思って通りすぎる」者17.5%、「わからない」者10.7%である。

「声をかける」者は、女子、年長層、既婚、有職者(特に教師・技術者)、主婦、大学生、男の大卒、地域への愛着が強い者、社会奉仕活動・宗教活動に従事している者、小・中学校の頃団体に加入して積極的に活動した者、無力感が低い者、生活態度が積極的な者などに多い。

一方、「通りすぎる」という者は、男子、若年層、未婚、学生、地域への愛着がない者、無力感が高い者、生活態度が消極的な者などに多い。

(2) スーパーマーケットでの万引の事例

スーパーマーケットで中学生が万引きするのを見たときの反応は、「本人に注意する」者26.8%、「店の人にいう」者33.7%、「だまって見すぞす」者24.8%となっている。

「本人に注意する」者は、男子、年長層、既婚有職者(特に教師・技術者)、女子の大学生・大卒、地域への愛着が強い者、グループ加入者、社会活動・宗教活動・社会奉仕活動に従事している者、無力感の低い者、積極的な生活態度タイプの者などに多い。

「店の人にいう」者は、女子、女子の既婚、女

子の中・高生(卒)に多い。

「だまって見すぞす」者は、若年層、未婚、学生、地域への愛着が弱い者、無力感が高い者、追従型などに多い。

(3) 電車やバスの中での座席の座り方の事例

電車やバスの中で、立っている人がいるのに、ゆっくりと間をおいて7人がけに6人が座っているのを見たときの反応は、「腹が立つが、だまっている」者31.9%、「老人が立っていれば、つめさせて座らせてあげる」者28.5%、「つめてもらって座る」者16.2%、「何も思わない」者12.2%、「自分もそうするから仕方がないと思う」者4.3%となっている。

「腹が立つが、だまっている」者は、大都市、女子、若年層、女子の未婚、学生、小・中学生の頃の参加経験がない者に多い。

「老人が立っていれば、つめさせて座らせてあげる」者は、女子、男子の既婚、グループ加入者、

グループに以前加入していた者、小・中学生の頃の参加経験がある者に多い。

「つめてもらって座る」者は、郡部、男子、年長層、既婚、有職者、小・中学生の頃の参加経験がある者に多い。

「何も思わない」者は、男子、男子の大卒、グループ非加入者に多い。

「自分もそうするから仕方がないと思う」者は、男子、若年層に多い。

4. 国政への参加意識

(1) 投票志向

国政への参加形態として典型的な投票行動について、19歳以下の人には、20歳になって選挙権をもった場合を想定して、20歳以上の人には、衆議院議員選挙の場合と地方選挙の場合を想定して、それぞれ投票する(と思う)かどうかを聞いている。

その結果は第2表のとおりである。

第2表 青少年の投票志向(グループ加入の有無別)

		投票する(と思う)	投票しない(と思う)	わからない
19歳以下		87.6%	4.8%	7.6%
		{ 89.5	{ 3.5	{ 7.1
		{ 86.1	{ 6.0	{ 8.0
20歳以上	衆議院議員選挙	80.5	13.1	6.4
		{ 83.6	{ 11.2	{ 5.2
		{ 79.1	{ 13.9	{ 7.0
地方選挙		82.8	9.5	7.6
		{ 85.2	{ 7.7	{ 7.2
		{ 81.6	{ 10.5	{ 7.9

注) 各欄の再掲の数字は、上段がグループ加入者、下段がグループ非加入者の数字である。

属性別にみると、三つの場合に共通しているのは、女子、地域へ愛着を持っている者、グループ

加入者、無力感の低い者に投票志向が高い。地域別には郡部の方が高いが、衆議院の例だけは郡部

より小都市でより高くなっている。年齢別では、19歳以下では年齢が低いほど投票志向は高くなるが、20歳以上では逆に年齢が高くなるにつれて投票志向は高くなる。20歳以上では、いずれの場合も男子の教師・技術者が投票志向は強い。生活態度タイプ別には、いずれの場合も「協力型」で投票志向は高く、19歳以下では「改革型」、20歳以上では「頑張り型」でも投票志向は高い。地方選挙の場合は、居住年数が長いほど高くなっている。

(2) 投票しない理由

投票しない(と思う)と答えた者の投票しない理由は、三つの場合に共通して、「政治に関心がないから」(37~39%)、「政治に信頼がおけないから」(21~23%)という理由が多い。20歳以上に共通して3番目に多いのは、「自分

が投票しても投票しなくても大勢に影響はないから」(14~16%)という理由である。

5. 社会奉仕活動への参加と態度

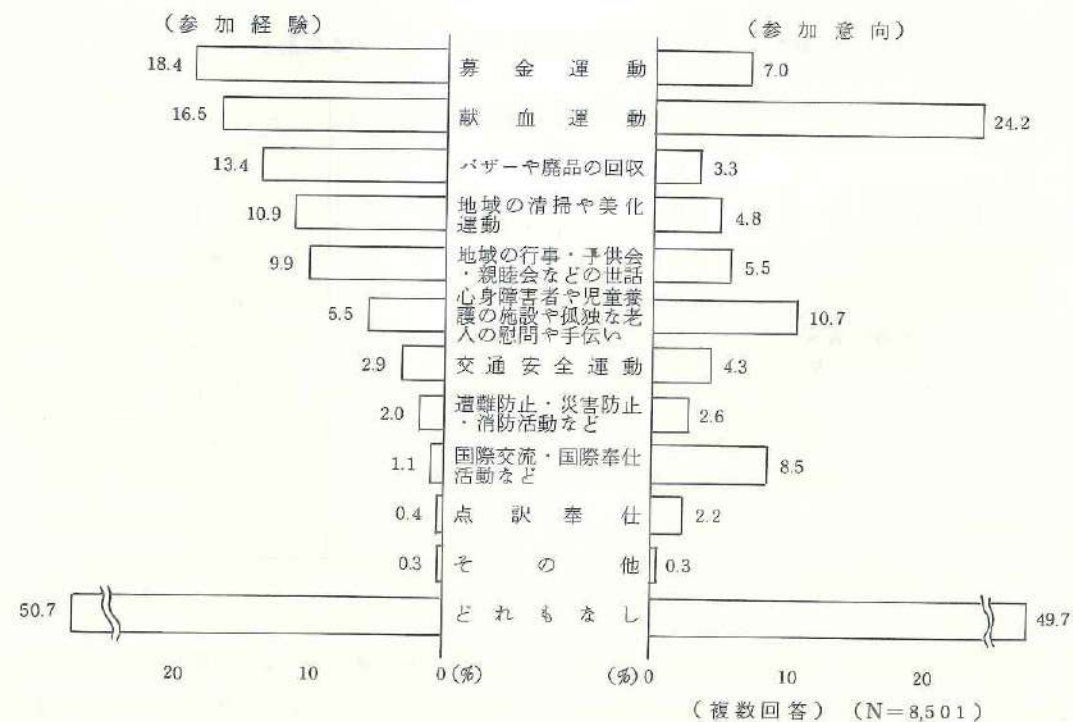
(1) 参加経験と今後の希望

過去2年くらいの間に、募金運動や献血運動など列挙された社会奉仕活動に参加した経験がある者は49.3%である。属性別にみると、郡部、女子(特に若年層・未婚)、学生、有職者では教師・技術者、男子の大卒、女子の高専・短大卒、グループ加入者、積極的な生活態度タイプの者などに多い。

今後加入してみたいと思う社会奉仕活動がある人は50.3%である。属性別特徴は、参加経験のある者の傾向と似ている。

参加経験の内容と今後参加してみたい活動内容を対比的に示すと第4図のとおりである。

第4図 過去2年間くらいの社会奉仕活動への参加経験と今後の参加意向



図で見るとおり、参加経験と参加意向はかなり違い違っている。参加経験では、「募金運動」(18.4%)、「献血運動」(16.5%)、「バザーや廃品の回収」(13.4%)などが多いが、参加意向は、「献血運動」(24.2%)が一番多く、次いで「心身障害者や児童養護の施設や孤独な老人の慰問や手伝い」(10.7%)、「国際交流・国際奉仕

活動(8.5%)などが続いている。

(2) 社会奉仕活動に対する態度

社会奉仕活動についてどう考えるか、7項目の考え方について意見を聞いている。その反応を肯定と否定に分けて示したのが第3表である。

全体として社会奉仕活動を肯定する傾向が強い

第3表 社会奉仕活動に対する考え方(グループ活動の有無別)

	肯定 [まったくそう だと思う +まあそう だと思う]	否定 [あまりそうだ とは思わない +全然そうだ とは思わない]	不明
(1) 社会奉仕活動は、暇のある人がやれば良いことである (時間的余裕)	28.6% { 22.4 32.1	71.3% { 77.4 67.6	0.2%
(2) 社会奉仕活動は、経済的に余裕のある人がやれば良いことである (経済的余裕)	33.1% { 28.5 36.0	66.6% { 71.1 63.6	0.3%
(3) 世の中は、助け合いのだから自分の生活を少く犠牲にしても社会奉仕活動に参加するべきである (犠牲的参加)	45.1% { 49.6 42.0	54.4% { 49.8 57.5	0.5%
(4) 本当に良い政治が行われるなら、社会奉仕活動などはなくなる (政治的解消)	43.8% { 41.8 44.7	55.5% { 57.6 54.5	0.7%
(5) 若者は大いに働き(学び)大いに遊んでいれば良いのであって、社会奉仕活動をするのはまだ早すぎる (時期尚早)	17.3% { 14.8 18.6	82.4% { 84.9 81.0	0.4%
(6) 社会奉仕活動は、自己訓練、人格向上のためにもなることだ (自己向上)	79.2% { 82.4 76.9	20.3% { 17.2 22.3	0.6%
(7) 社会奉仕活動は、自分の生きがいである (生きがい)	14.7% { 16.0 13.9	84.6% { 83.1 85.5	0.7%

注) 肯定、否定欄の再掲の数字は、上段がグループ加入者、下段がグループ非加入者の数字である。

が、社会奉仕活動は生きがいとまでいう者は14.7%である。また、「犠牲的参加」、「政治的解消」については否定する者が多いが、明確な傾向を示していない。

属性別にみると、社会奉仕活動に肯定的な傾向

を示すのは、郡部、女子、学生、有職者では教師・技術者と事務職員、大卒(女子では、高専・短大卒も)、グループ加入者、地域への愛着が強い者、無力感が低い者、積極的な生活態度タイプの者などである。

6. グループ加入の有無及び少年期の参加経験の有無別による傾向

(1) グループ加入の有無別による傾向

グループ加入の有無によって、どういう傾向が表われているかをまとめてみると、

公衆の中での参加では、スーパーマーケットで中学生が万引きをするのを見たときの反応として「本人に注意する」という者がグループ加入者に多いし、電車やバスの中で、立っている人がいるのに、ゆうゆうと間をおいて7人がけに6人が座っている場合の反応として、グループ加入者では、

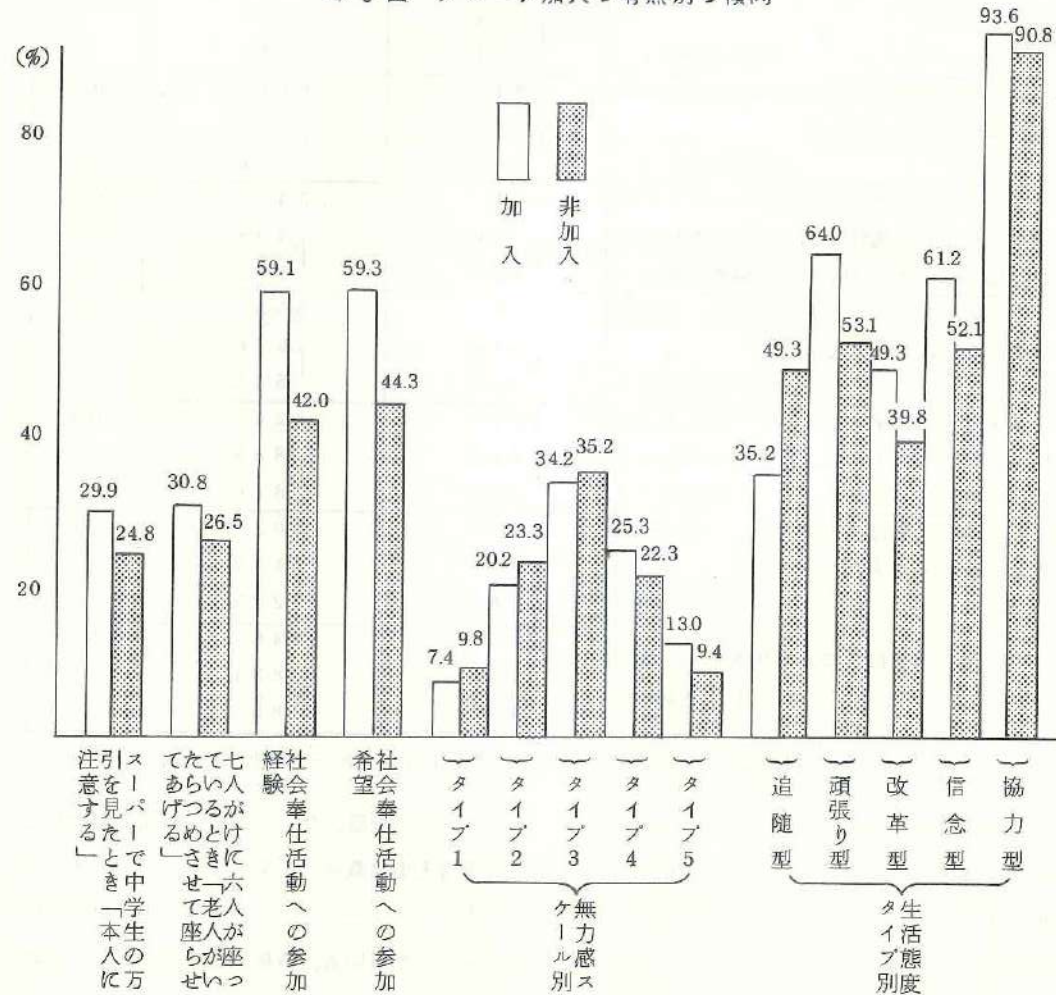
「老人が立っていれば、つめさせて座らせてあげる」と答えた者が多く、「何も思わない」者は非加入者に多い(第5図参照)。

投票志向については、すべてのケースでグループ加入者の方がそうでない者よりも投票志向が高い(前掲第2表)。

社会奉仕活動については、グループ加入者の方がそうでない者よりも参加経験が多いし、参加希望も多い(第5図)。また、社会奉仕活動に対する考え方も肯定的な傾向が強い(前掲第3表)。

無力感スケールや生活態度タイプ別でみると、

第5図 グループ加入の有無別の傾向



グループ加入者には、無力感の低い者、積極的な生活態度タイプの者に多い傾向がある(第5図)。

(2) 小・中学生の頃の参加経験の有無による傾向

小・中学生の頃の参加経験の有無によって、どういう傾向があるかをまとめてみると、

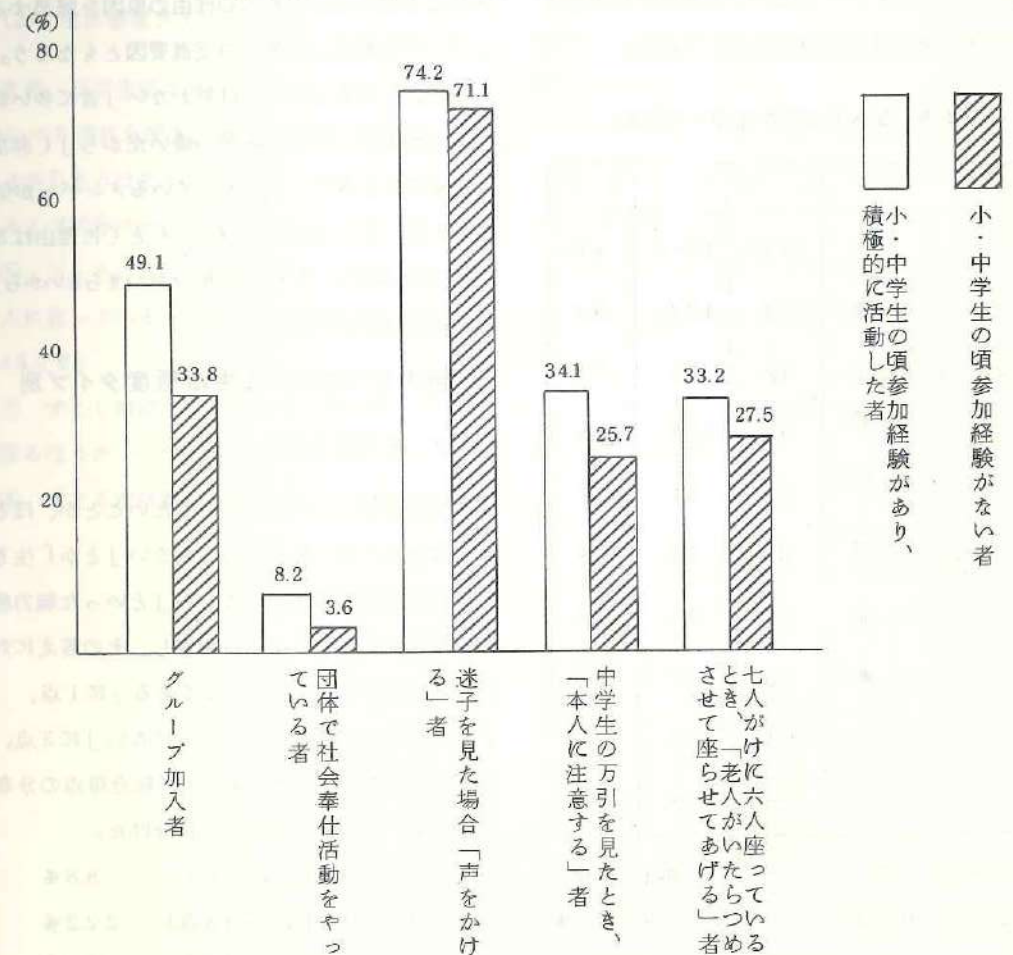
グループ加入の有無については、小・中学生の頃、地域の子ども会やボーイスカウト、ガールスカウトのような団体やサークルに「入っていて積極的に活動した」者の方が、そうでない者よりもグループ加入者が多いという傾向がある(第6図)。

参加団体の活動内容別には、社会奉仕活動をし

ている者に小・中学生の頃「入っていて積極的に活動した」者が多い(第6図)。

公衆の中での参加では、小・中学生の頃「入っていて積極的に活動した」者の方がそうでない者より、商店街の迷子に「どうしたのと声をかける」者が多く、スーパーマーケットで中学生の万引きを見かけたとき、「本人に注意する」者が多く、電車やバスの中で7人がけに6人が座っているとき、「老人が立っていればつめさせて座らせてあげる」と答えた者が多いという傾向がある(第6図)。

第6図 小・中学生の頃の参加経験の有無による傾向



7. 今後の参加希望と阻害要因・促進要因

(1) 今後の参加希望

現在グループやクラブに加入していない者に、今後、時間や暇があればグループ・クラブ・研究会に加入したいと思うかと聞いた結果、「加入したいと思う」と答えた者は54.2%、「加入したいとは思わない」と答えた者は45.8%であった。

「加入したいと思う」者の属性的特徴をみると、郡部、女子、若年層、学生、有職者では教師・技術者、大卒、以前加入していた者、地域への愛着が強い者、積極的な生活態度タイプに多い傾向がある。

次に、「加入したいと思う」者が希望する活動を3位まで挙げさせたのが第4表である。

第4表 加入希望者が希望する活動

	1位	2位	3位
スポーツ	57.1%	19.1%	8.1%
趣味・教養	32.1	42.4	9.4
親睦・情報交換	1.8	8.0	17.2
職業のための技術・訓練	4.8	12.3	19.3
社会奉仕活動 (ボランティア)	3.3	5.1	11.7
社会活動(住民運動・消費者運動)	0.3	0.9	2.8
政治活動	0.2	0.5	1.0
宗教活動	0.3	0.7	1.5
その他	0.1	0.0	1.1
不明	—	10.9	27.9

表でみるとおり、「スポーツ」と「趣味・教養」を合わせて89.2%となり、この二つの活動に集中している。この二つの活動について属性別にみ

ると、「スポーツ」を希望する者は男子。男子では有職者、女子では学生(特に中・高生)、男子で中・高卒、信念型に多い。「趣味・教養」を希望する者は女子。女子では有職者、男子では学生・教師・技術者・大卒、追従型に多い。

(2) グループ活動の阻害要因、促進要因

現在加入していない者の非加入理由ごとの参加希望をみると、「加入したいと思う」者に多い非加入理由は、「指導者が良くないから」(加入希望76.0%)、「適当な団体がどこにあるか知らないから」(70.3%)、「勉強が忙しいから」(63.6%)、「適当な仲間がいないから」(60.7%)などである。これらの理由の原因を解消することができれば、参加への促進要因ともなる。

一方、「加入したいとは思わない」者に多い非加入の理由は、「団体活動が嫌いだから」(非加入希望65.1%)、「集まっているメンバーが気に入らないから」(57.4%)、「とくに理由はない」(56.9%)、「行事や集会がつまらないから」(55.0%)などである。

8. 無力感スケールと生活態度タイプ別

(1) 無力感スケール

この調査では、「自分のやりたいことが、ほとんどできなくて、生活がつまらない」とか「生きているのがなんとなくむなし」といった無力感の程度を聞く項目を7項目用意し、その答えに対して「無回答」に0点、「よくある」に1点、「時々ある」に2点、「めったにない」に3点、「まったくない」に4点を与え、総合得点の分布に従って、次のようなタイプに分けた。

- ① タイプ1(13点以下) 8.8%
- ② タイプ2(14点~16点) 22.2%
- ③ タイプ3(17点~19点) 34.9%

④ タイプ4(20点~22点) 23.5%

⑤ タイプ5(23点以上) 10.6%

タイプ1が一番無力感の強い層であり、タイプ5が一番無力感の弱い層である。それぞれのタイプに属する者の割合は上記のとおりである。このタイプ別は社会参加の実態や意識に影響するであろう軸として分析に用いられている。

属性別にみると、無力感が高い層は、郡部、女子では若年層、未婚者、住んでいる土地へ愛着を持っていない者、グループに加入していない者に多い。逆に、大都市、女子の年長層、高学歴者、男子の教師・技術者、主婦などに無力感の低いタイプが多い。

(2) 生活態度タイプ別

次に、日常生活でその人がとるであろう態度について5項目を聞き、それぞれについて「そう思う」か「そうは思わない」かによって、次のようなタイプに分けた。

- ① リーダーになって苦勞するよりは、のんきに人に従っているほうが気楽でよい — 追従型(43.5%)
- ② すこし無理だと思われる位の目標をたてて頑張るほうだ — 頑張る型(57.4%)
- ③ できるだけ新しいものをとり入れてどんど

ん改革していくほうだ — 改革型(43.8%)

④ ものごとに妥協するのはもっともよくない。自分の信念はできるだけつらぬくほうだ — 信念型(55.6%)

⑤ 人間は、ひとりでは無力だが、みんなで力を合わせれば相当のことができるものだ — 協力型(92.0%)

この生活態度タイプも分析の軸として用いられている。属性別にみると、

「追従型」は、相対的に郡部、女子(特に年長層)、男子では既婚・子有り、主婦、グループ非加入者、地域への愛着を持っていない者などに多い。

「頑張る型」は、大都市、男子(特に年長層、既婚)、大卒、グループ加入者、地域への愛着を持っている者などに多い。

「改革型」は、男子(特に年長層、既婚、大学生、大卒)、グループ加入者、地域への愛着を持っている者などに多い。

「信念型」は、男子、若年層、女子の未婚、グループ加入者、地域への愛着を持っている者などに多い。

「協力型」は、女子、有職者、学生、グループ加入者などに多い。

